

### 3 . アボリジナルとスポーツ

尾崎 正峰

はじめに

本稿において「アボリジナルとスポーツ」<sup>(1)</sup>というテーマについて考えていくことになるが、当然のことながら、筆者がこれまで進めてきたオーストラリアのスポーツ研究での視点、問題意識と同じくしている。

第一に、オーストラリアは「スポーツ天国」と賞賛されることが多いように思われるが、現実にはスポーツにおける「不平等」<sup>(2)</sup>が根深く存在している。その実態と構造をとらえることは緊要な課題である。たとえば、スポーツ参加において、移民、エスニシティ<sup>(3)</sup>、ジェンダー、障害の有無などによって大きく異なっている。第二に、こうした「不平等」な問題状況の背景、あるいは問題を規定している要因を探るにあたっては、スポーツ自体のみならず、スポーツをとりまくさまざまな社会事象にまで目を向けることが不可欠である。第三には、これらの諸点や構造は歴史的に形成されてきたものとしてとらえ、その展開過程を考察することである。

本稿では、このような視点、問題意識の元に、アボリジナルとスポーツに関する現在の姿の特徴を伝える2つのエピソード(ひとつは、シドニー・オリンピック大会およびキャシー・フリーマンをめぐって、もうひとつは、オーストラリア・フットボールにおける人種差別禁止条項の制定をめぐって)を提示し、それらを取りまくオーストラリアの社会の状況をとらえるなかで、エピソードが示している意味を探っていく。そして、19世中盤、アボリジナルとスポーツの初発段階の状況を当時の社会状況とともにとらえていく。これらの作業を通して、オーストラリアの社会におけるアボリジナルとスポーツに関する今後の研究課題を探ることとしたい<sup>(4)</sup>。

#### 1 . 「アボリジナルとスポーツ」の現在

～ 2つのエピソード

##### (1) 「ロール・モデル」としてのキャシー・フリーマン

日本において、アボリジナルとスポーツが明確に意識化されたのは、いつからのことであろうか。その時期を確定することは困難であるが、ひとつの区切りとして2000年に開催されたシドニー・オリンピック大会をあげることは異論のないところであろう。

同大会の特徴は、1956年のメルボルン大会以来の久々のオーストラリアでの開催であったこと、メイン会場の建設をめぐる大きな議論を呼び起こした環境問題への注目など、さまざまな点をあげることができる。その中で、本稿のテーマとの関連で第一に指を屈すべきものは、開会式のセレモニーにおいて行われた「オーストラリアの歴史と文化」と題されたアトラクションであり、その構成・内容であろう。

オーストラリア大陸がまだ海底にあった太古の昔から説き起こされ、入植者による開拓という時代を経て現代へ、そして未来へと連なる長い時の流れを表現する全7場で構成されたこのアトラクションは、現代のオリンピックが持つメディア・イベントとしての性格を反映して非常に華やかなものであった。そのきらびやかさに惹きつけられたことも事実であるが、とくに現代に関わる場面において多様な民族の人々が登場していたことは、この大会がまぎれもなく20世紀最後の年にオーストラリアで開催されたことを象徴するものであった。多くの論者が指摘するように、ここには、オーストラリアが多文化・多民族の人々によって構成され、それぞれの民族が手を携えていくことを目指す多文化主義の国家・社会であることが示

されていた。

そして、その中でもひととき目を引いたものが、アトラクションの進行役であった白人の少女とアボリジナルの長老の二人であったろう。アトラクションに、2,000 人ものアボリジナルが参加していたこともあわせて、ここに白人とアボリジナルの人々との和解というメッセージが込められていたことは明らかであった<sup>(5)</sup>。

この白人とアボリジナルの人々との和解というメッセージは、聖火リレーの最終ランナーとしてキャシー・フリーマンが登場したことによって、より鮮明となったといえる。現役のアスリートが最終ランナーとして登用されることは異例であったが、大会の理念をアピールする存在として抜擢されたといえる<sup>(6)</sup>。

さらに、彼女が象徴の役割を果たす舞台はこれで終わりではなかった。彼女は、400m走において金メダルを獲得したゴールの後、アボリジナルの旗とオーストラリア国旗をつなぎ合わせ、スタジアムをウィニング・ランした。この映像は全世界に流され、多くの人々が開会式のセレモニーで示されたメッセージをあらためて思い起こしたであろう。そして、オリンピック史上においても、人々の心に強く、そして長く記憶に残るシーンとなったといえる。

しかし、彼女がこうした行動を取るのには、このシドニー大会が初めてではなかった。1994年、カナダで開催されたコモンウェルス・ゲーム（Commonwealth Games）の400m走で優勝した際も、自らが用意したアボリジナルの旗を掲げてウィニング・ランを行い、観客から渡されたオーストラリアの国旗も同時にかざした。この行動を選手団長アーサー・タンストール（Arthur Tunstall）は非難をしたが、政府をはじめ、メディアも彼女の行動を支持し、人々の反応も彼女の行動を評価するものであった<sup>(7)</sup>。

このように、キャシー・フリーマンは金メダルを獲得した優秀なアスリートとしてのみならず、和解の象徴という社会的存在にとらえられるようになった。くわえて、彼女については、社会での

ステップ・アップ、インヴォルヴメントなどアボリジナルの人々の生活全般にとって大きな課題となっている問題（解決）についての「ロール・モデル」として多くの視点から語られている。オーストラリアにおいて、これまでもアボリジナルのスポーツ選手が注目を浴びることは少なくなかったが<sup>(8)</sup>、彼女のケースはそれらの蓄積の上に行っているといえる。

## （2）競技場での野次と反レイシズム

1995年、オーストラリア・フットボールにおける人種差別的行為の禁止条項（Rule no.30）が制定された。この条項は、選手個人の民族、宗教、肌の色、国やエスニックのオリジンによる脅し、中傷、侮辱することを禁じることを定めたものであった。差別発言に対しては、違反した選手の所属クラブに対して50,000豪ドルの違反金を払うことなども盛り込まれていた<sup>(9)</sup>。

こうした内容を持つ条項は、オーストラリア・フットボール・リーグ（Australian Football League）として初めてのものであるばかりではなく、オーストラリアのスポーツ界でも最初のものであった。そもそも、こうした条項が制定される直接的な経緯はどのようなものであったのだろうか。それは、オーストラリア・フットボールの試合で起こった「事件」を発端としている。

1993年、セント・キルダのニッキー・ウィンマー選手が、対戦相手のコリングウッドのファンが彼の肌の色をからかったのに対して、シャツをめくり上げ、腹の部分をむき出して抗議の意思を示した（これは、彼自身は「浅黒い肌」を誇りに思うということの表明であった）。また、1995年のアンザック・デイ（ANZAC Day）のメルボルン・クリケット・グラウンドにおける試合において、エセンデンのマイケル・ロング（チェ・コカトゥ＝コリンズはアボリジナル名）も差別を受けたと抗議した。これらの「事件」を受けて、リーグとしての対策を講じることが求められ、上記の条項の制定につながった。

これらの「事件」は、民族、人種などに絡んだ差別的な発言が飛び交うことが、スポーツの場面にも現れたものであった。いや、逆に、人々の情動に訴え、感情がよりストレートに表出されるスポーツの場面であればこそ、原初的な意識が現れた事例ととらえることもできよう。この「事件」について、オーストラリアにおけるエスニシティをめぐる差別に関する歴史的な経緯を含めて考えると、かつてアングロ＝ケルティックの人々からさげすまれてきた民族(エスニック) そのときに浴びせかけられた罵詈雑言を今度はアボリジナルの人々に投げかける構図ととらえることもできよう。言ってみれば、「差別(意識)の順送り」という負の循環構造である。

同時に、その負の循環構造を断ち切ろうとする動きが出てきていることもまた事実である。この項の冒頭に示した禁止条項(Rule no.30)はその証左であろう。この条項が成立した社会的背景には、一言で言えば、多文化主義政策の浸透があったといえる。歴史的な傍証としてひとつあげるならば、上記の条項に20年先んじる“the Racial Discrimination Act 1975”がある。

## 2. 多文化主義～構築とゆらぎ

オーストラリアが国家の政策として多文化主義を選択してから40年近い年月が経とうとしている。その歳月の中で政策のレベルにとどまらず、社会意識も「白豪主義」を標榜していた時代とは一変したといえる。オーストラリアというひとつの国にとどまるものではない、世界的に見ても大きな成果を上げたということができよう。それにともなって、アボリジナルの社会的な位置を向上させるという側面が現れてきた<sup>(10)</sup>。

しかし、その一方で、差別の残存という側面が抜きがたいともいえる。この側面に目を向ければ、オーストラリアにおいてさえも多文化主義をめぐる、大きな振幅があり、ある種のゆらぎが出てきている。政策・政治レベルで見ても、1990年代の保守系のハワード政権による方針の「変更」、

そしてポーリー・ハンソン＝ワン・ネイション党の台頭という事態がある。ポーリー・ハンソン＝ワン・ネイション党そのものは、その後、内部での主導権争いの末の分裂、そして衰退という顛末を見せたが、現在においても民族、人種をめぐる極端な現象が間欠泉のようにわき上がることを示している<sup>(11)</sup>。

多文化主義に舵を切って以降、オーストラリアではさまざまな社会的な経験と知恵を蓄積してきたといえる。そのオーストラリアにおいてさえも、差別の根絶は困難な課題であるといえる。一方での前進と、もう一方で逆のベクトルの方向へ進もうとする力や動きが社会に出てくること。前項の2つのエピソードは、その複雑な様相を示しているといえないだろうか。

## 3. 「文明化」の手段としてのスポーツ

ここでは、アボリジナルと近代スポーツとの最初の接点が見いだされる19世紀中盤から20世紀に入る頃までに時間をさかのぼって、アボリジナルとスポーツの姿を見てみよう。

多くの研究が示しているように、1788年、イギリスの入植以後、アボリジナルの土地、生命、伝統の収奪と破壊は著しいものがあつた。1840年代頃まで、オーストラリア南部や東部のアボリジナルの人々が抵抗してきたが、帝国イギリスを後ろ盾とする入植者たちの武器を含めた物量面での圧倒的な差は埋められるべくもなかった。悠久の昔からオーストラリアの大地に生き、その自然と寄り添う形で暮らしてきたアボリジナルの人々は、イギリスからの入植者によって社会の周縁部へと押しやられていった<sup>(12)</sup>。

こうした入植者による抑圧的、暴力的なアボリジナルの人々への対応のあり方に変化の兆しが現れたのは、1830年代に入ってからであろう。その背景には、本国イギリスにおける人道主義者たちの主張が大きくなってきたことがあり、植民地であったオーストラリアにおいても、この声を無視するわけにはいかなかったのである。

いわゆるアボリジナルの「保護政策」の時期に入り、主には、入植者による暴力・収奪からの保護という事柄から始まったが、アボリジナルの人々への教育の普及等、生活面での改善に関することも含まれていた。これを担ったのは、ミッション（mission）というキリスト教各派が経営した伝道所集落であった。また、ステーション（country station）という植民地政府が関与してアボリジナルの居留地として設置した場所においても、教育、等さまざまな手だてが講じられた。

このような「保護政策」が採られるようになったとはいえ、1840年代までのアボリジナルのスポーツへのアクセスは、ほとんど見られないといってよい状況であった。それは、アボリジナルの人々が「保護」される対象ではあったが、法的にも、経済的にも、社会的にもほとんど無権利状態に置かれていた厳しい現実を反映していたものであった。同時に、オーストラリア全体を見ても、スポーツを享受できる層が限定されていたという時代的な制約もあった。1838年になってメルボルン・クリケット・クラブが結成されたように、入植者の中・上流層の間でもようやく組織的なスポーツが展開し始めた時期であった。労働者階級の下層の人々は、故国にいたときに行っていたスポーツを労働のひとつの合間を楽しむために行うようになってきた程度であった<sup>(13)</sup>。

その後、1850年代から60年代にかけてある種の変化が現れた。ひとつには、奇妙な混在状況ともいえるものが見えてくる。植民地創設記念などの祭典の一部としての競技会にアボリジナルが参加し、ブーメランなどの伝統を披露するなどの事例に見られるように、スポーツという場を通して入植者とアボリジナルの人々との融和をはかる側面が見られるようになった。この背景には、やはり「保護政策」の流れもあったこと、そして、アボリジナルの人々を入植者に抵抗する危険な存在であることとらえなくなってきたことがある。さらに付言するならば、アボリジナルの人々をイベントにおけるアトラクション（悪く言えば、「見せ物」的な位置づけ）として考えていたことがなかった

とはいえないのであろう。

もうひとつ特徴的なことは、アボリジナルの「文明化」を促進するという枠組みの中で近代スポーツの普及が進んだことである。クリケット、競馬、ボクシング、陸上競技、漕艇などの種目がアボリジナルの人々に紹介された。「遅れた」民族とされたアボリジナルの人々を「文明化」させるためという目的で、キリスト教のミッションを中心にさまざまな手だてが講じられたことは前述したが、これらの活動の中の一つとしてスポーツが取り上げられた。いってみれば、このときスポーツは、「文明化」の手段としてアボリジナルの人々に対して「与えられた」という性格を強く持っていたといえる。

いくつかの種目の中で、とくにアボリジナルの人々の間に普及したものがクリケットであったが、このことにもひとつの意味があった。クリケットとは、すなわちイギリスのジェントルマンのあり方を体現するスポーツであるという意識が入植者、とくに中・上流層に強かった。たとえば、1850年、南オーストラリアのポート・リンカーン近くのブーニンディにミッションを作ったヘイルは、「スポーツの試合、とくにクリケットのそれは、倫理的にアボリジナルの人々を鍛え上げる」と信じて疑わなかった<sup>(14)</sup>。これらの考え方には、藤川も指摘するようにパターナリズムとイギリス文明への同化というねらいが埋め込まれていた<sup>(15)</sup>。

その意図はともあれ、現実には、アボリジナルの人々の「文明化」をはかるための他の手段はほぼすべて失敗に帰したのに対して、スポーツ、とくにクリケットはアボリジナルの人々の間に広まった。この理由はさまざまに語られている。スポーツそのものの面白さに惹かれた、アボリジナルの伝統的な技法（たとえば、ブーメラン投げ）と親和性があった、などである。そして、ミッションの場とは別に、牧場主が労働者としてのアボリジナルにレクリエーションとしてスポーツを教えるという側面もあった。そして、数はそれほど多くなかったものの、牧場間のクリケットの試合も行われていた。

アボリジナルの人々の間にクリケットは広まる中、そのエポック・メイキング的な出来事として、1868年、オーストラリア初のクリケット・チームの遠征をあげることができよう<sup>(16)</sup>。アボリジナルによるクリケット・チームとして初めてであったばかりではなく、オーストラリアからイギリスに遠征した最初のチームであった。遠征期間は約5ヶ月間で、この間のプレイ日数は99日を数えた。試合数・戦績は、47試合、14勝14敗19引き分けで、興行的にも大成功を納めた。イギリスのメディア（新聞）も「彼らはイギリスのジェントルマンのような振る舞いをした」等、比較的好意的な受けとめ方をしていた<sup>(17)</sup>。

#### 小括～歴史の跋行とアボリジナルのスポーツ

前項において、19世紀中盤以降、オーストラリアにおけるアボリジナルの人々の間にクリケットが広がっていったことについて、その社会的背景を含めて見てきた。前項の最後、アボリジナルのクリケット・チームのイギリス・ツアーの成功までを見るならば、この後、発展を続けていくかのように思えた。しかし、その後まもなく、アボリジナルの人々はクリケットから排除される方向へと変わっていった。

1860年代に入ってからすでにその動きがあったが、「保護政策」をさらに強化したアボリジナルの「保護隔離政策」が、1870年代以降本格化していった。たとえば、1897年、「クイーンズランド州アボリジニ保護およびアヘン売買制限法」の成立は、「保護」を名目とする管理と統制の強化であり、より強烈な差別の現れであった。1901年、オーストラリア連邦結成によって移民制限法が成立し、これをもって白豪主義政策の完成とされるが、この中の特質として人種分離政策ともリンクするものであった。こうした政策展開の理念的な背景には、社会ダーウィン主義（Social Darwinism）の蔓延があった。

クリケットという種目に限定してみると、白豪主義の形成の中で、宗主国イギリスに対して、

クリケットを通してのオーストラリアのナショナリズムの表出ということが意識され始め<sup>(18)</sup>、その担い手としての「白人」<sup>(19)</sup>ということが強く意識されるようになった。

こうして、入植者にとって「イギリス的」「ジェントルマン」「白人性」「ナショナリズム」等を象徴するものとしてとらえられたクリケットからアボリジナルの人々は退場を余儀なくされた。その一方で、彼らの活動の舞台は「労働としてのスポーツ」へ転換したととらえることができる。種目としては、陸上競技、ボクシング、等であった。これらの種目は、下層の労働者の鬱憤晴らしの慰みの対象として、ギャンブル、暴力がつきまとうもので、「Blood Game」と呼ばれることもあるものであった。アボリジナルの人々は、生活の糧を得るため、こうした種目の賞金スポーツ競技会へ参加するようになった。アボリジナルの人々の参加するスポーツ種目の現在の偏差の一つの源流をここに見いだすこともできよう。

こうしたことから、冒頭にキャシー・フリーマン、そして、オーストラリア・フットボールにおける禁止条項という2つのエピソードを掲げたが、これらの事柄を構造的に理解するためには、今回取り上げたオーストラリアの歴史、その過程におけるアボリジナルとスポーツの関係から読み解いていくことが重要であることを指摘して、この稿を閉じたい。

#### 【注】

(1)オーストラリア先住民を総称する言葉として、従来までは「アボリジニ（aborigine）」が多く用いられてきたといえる。しかし、藤川の指摘（藤川隆男「オーストラリアへの移民：大洋を渡る女たち」『移民』ミネルヴァ書房、1998）によれば、この語は差別用語として公的には使われなくなってきており、また、オックスフォード英語辞典は、アボリジニを単数形で用いることは差別的であると明示し、「アボリジナル（aboriginal）」の使用を勧めているなどの動きがあるという。

なお、「アボリニーズ（aborigines）」と複数形

で用いることには問題はないが、日本語のように単数・複数の区別のないところでは「アボリジナル」とする方が無難ともしている。

筆者は、この指摘に従って、既刊の拙稿においては「アボリジナル」の表記を用いているが、今回もそれを踏襲していく。

(2)この点については、スポーツ社会学の研究領域からは、Jim McKay などが繰り返し指摘してきているものである。J. McKay, J. Hughson, G. Lawrence and D. Rowe, *Sport and Australian society*, J.M.Najman and J.S.Western (eds.), *A Sociology of Australian Society (3rd edition)*, MACMILLIAN, 2000.

これらの研究動向については、尾崎正峰「進化するオーストラリアのスポーツ研究」『一橋大学スポーツ研究』Vol.22、一橋大学スポーツ科学研究室、2003、参照。

(3)オーストラリアのスポーツにおける「不平等」について、移民、エスニシティをキーワードとして以下のものをまとめた。

\* 尾崎正峰「スポーツ、移民、エスニシティ」『一橋大学スポーツ研究』Vol.25、一橋大学スポーツ科学研究室、2005。

\* 尾崎正峰「移民、エスニシティとオーストラリア・スポーツの展開」高津勝、尾崎正峰編著『越境するスポーツ - グローバリゼーションとローカルリティ』創文企画、2006。

(4)「アボリジナルとスポーツ」をテーマとする先行研究は、日本語文献では非常に数が少なく、管見の限りでは、現在までのところ、以下のものがすべてと思われる。

\* 藤川隆男「アボリジナルの近代スポーツ史」『帝塚山大学教養学部紀要』Vol.40、1994。

\* 久保正敏「アボリジニとスポーツ」小山修三、窪田幸子編『多文化国家の先住民 - オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社、2002。

\* 小澤英二「アボリジナルとスポーツ」『西洋史学』第 231 号、2008。

藤川の研究は、アボリジナルの人々のスポーツの姿を、オーストラリアの社会をめぐる歴史的視

点を含めて、複合的にとらえた国内最初の研究であり、すでに 15 年というときが経過しているが、その視点はなお有効なものを多く含んでいる。

久保の研究は、アボリジナルのスポーツの変遷過程について 4 つの時期区分を行い、それぞれの時期において特徴的なアスリートを取り上げながら、各時期のアボリジナルのスポーツの特質を描き出している。

小澤の研究は、筆者も参加したオーストラリア学会大会(2008年6月)「フォーラム オーストラリアにおける白人性の相克 - 先住民によるスポーツと移民制限」での報告を元にしたものである。1968年のオリンピック・メキシコ大会のアメリカの黒人選手が表彰式において拳を高く掲げた「ブラック・パワー・サリュート」から説き起こし、ここで示された差別への抗議の意志とアボリジナルのスポーツの歴史・現状を重ね合わせて論じている。シドニー大会でのキャシー・フリーマンの行動の意味についてもアンビバレントな側面があることを指摘している。

これらの日本語文献を含めた先行研究のより詳細なレビューは、「アボリジナルとスポーツ」研究の全体像をとらえる作業を進める中であらためて行うという意味で、今後の課題としたい。

なお、現段階では先行研究の全体的な構造の提示はできないが、これまでに収集、検討したアボリジナルとスポーツに関する研究成果については本文における引用文献、および文末の参考文献一覧において示している。

(5) 開会式以外での、シドニー大会におけるアボリジナルを表象するものとしては、大会のロゴマークはブーメランを意匠したものであったこと、同時に開催されたアートフェスティバルは“The Festival of the Dreaming”と題されるものであったことなどをあげることができる。

(6)キャシー・フリーマンが聖火リレーの最終ランナーに決定するまでのいきさつについては、以下の文献を参照。Harry Gordon, *The Time of Our Lives*, University of Queensland Pres, St Lucia, 2003.

また、C. Freeman with S. Gullan, Cathy: Her Own Story, Camberwell, Penguin, 2003、も参照。

なお、アボリジナルの団体がオリンピックのボイコットを主張したことがあった。最終的には、ボイコットの主張は社会的には受け入れられなかった。Douglas Booth and Colin Tatz, *One-eyed: a view of Australian Sport*, Allen & Unwin, 2000, p.14.

(7)コモンウェルス・ゲームにおけるキャシー・フリーマンの行動については、前掲、藤川隆男「アボリジナルの近代スポーツ史」、参照。

(8) Colin Tatz and Paul Tatz, *Black Gold: the Aboriginal and Islander Sports Hall of Fame*, Aboriginal Studies Press, 2000.

(9)Greg Gardiner, Racial Abuse and Football: The Australian Football League's Racial Vilification Rule in Review, *Sporting Traditions*, Vol.14, No.1(Nov. 1997). Greg Gardiner, 'Black' Bodies - 'White' Codes: Indigenous Footballers, Racism and the Australian Football League's Racial and Religious Vilification Code, John Bale and Mike Cronin (eds.), *Sport and Postcolonialism*, Berg, 2003.

(10)オーストラリアの多文化主義については参照すべき文献は数多くあるが、ここでは以下の2つのものをあげておく、関根政美『マルチカルチュラル・オーストラリア』成文堂、1989。アル・グラスビー『寛容のレシピ』NTT出版、2002。

(11)詳細は、ガッサン・ハージ『ホワイト・ネイション』平凡社、2003。また、塩原良和『ネオリベラリズム時代の多文化主義』三元社、2005、も参照。なお、ハワード政権、およびポーリー・ハンソン＝ワン・ネイション党が「優遇措置」を批判し、その「是正」を主張したが、その矛先はアボリジナルの人々だけではなく、移民層にも向けられていた。

(12)オーストラリアの歴史をめぐって、アボリジナルの人々の姿をどのように描くのかについての歴史観をめぐる論争がある。その中の主張のひとつに、日本における「自虐史観」と重なる部分も

見て取ることもでき、その意味で興味深い。

関根政美・関根薫「多文化主義社会オーストラリアと国民の歴史」『オーストラリア研究紀要』第26号、追手門学院大学オーストラリア研究所、2000、参照。

(13)前掲、尾崎「移民、エスニシティとオーストラリア・スポーツの展開」、参照。

(14) Richard Cashman, *Paradise of Sport: the Rise of Organised Sport in Australia*, Oxford University Press, 1995, pp.131-135.

(15) 前掲、藤川隆男「アボリジナルの近代スポーツ史」、参照。

(16)Ashley Mallett, *The Black Lords of Summer: The Story of the 1868 Aboriginal Tour of England and Beyond*, University of Queensland Press, 2002. Rex Harcourt, John Mulvaney, *Cricket Walkabout: the Aboriginal Cricketers of the 1860s (3<sup>rd</sup> ed.)*, Golden Point Press, 2005. Bill Hornadge, *Cricket in Australia 1804-1884*, Review Publications, 2006.

(17)白人によって構成されたチームの渡英は、この10年後のことであった。また、少し時間をさかのぼって、イギリスとオーストラリアのクリケットの国際試合の状況を見てみると、イギリスのチームの来豪による初の英豪国際試合は1861年のことであった。そのとき、イギリス・チームは11名、オーストラリア・チームは22名という大きな人数的なハンディをもらったにもかかわらずオーストラリア・チームは歯が立たなかった。そのことを考えると、アボリジナルの人々によるチームの戦績は、この時期からするとかなり健闘しているということができよう。

(18)この点については、オーストラリアにおけるスポーツ史研究の領域で継続的に探求されている。たとえば、*Sporting Traditions*, the Australian Society for Sports History (年4回発行)には多くの論考が掲載されている。

(19)藤川隆男編『白人とは何か?』刀水書房、2005、参照。

< 参考文献 >

- \* Daryl Adair and Wray Vamplew, *Sport in Australian History*, Oxford University Press, 1997.
- \* Richard Cashman, O'Hara and Andrew Honey(eds.), *Sport, Federation, Nation*, Walla Walla Press, 2001.
- \* Richard Cashman, *Sport in the National Imagination: Australian Sport in the Federation Decades*, Walla Walla Press, in conjunction with the Centre for Olympic Studies, University of New South Wales, 2001.
- \* Harry Gordon, *The Time of Our Lives : Inside the Sydney Olympics ; Australia and the Olympic Games 1994-2002*, University of Queensland Press, 2003.
- \* Max Howell, Reet Howell and David W. Brown, *The Sporting Image: A Pictorial History of Queenslanders at Play*, University of Queensland Press, 1989.
- \* Colin Tatz, *Aborigines in Sport*, Australian Society for Sports History, 1987.
- \* Colin Tatz, *Obstacle Race: Aborigines in Sport*, UNSW Press, 1995.
- \* Colin Tatz, *Race, Sport and Politics, Sporting Traditions*, Vol.1, No.1(Nov. 1984).
- \* Daryl Adair, *Conformity, Diversity, and Difference in Antipodean Physical Culture: The Indelible Influence of Immigration, Ethnicity, and Race during the Formative Years of Organized Sport in Australia, c.1788-1918*, Mike Cronin and David Mayall, *Sporting Nationalisms: Identity, Ethnicity, Immigration and Assimilation*, Frank Cass, 1998.
- \* Darren Godwel, *The Olympic Branding of Aborigines: The 2000 Olympic Games and Australia's Indigenous Peoples*, Kay Schaffer and Sidonie Smith (eds.), *The Olympics at the Millennium*, Rutgers University Press, 2000.
- \* Daryle Rigney, *Sport, Indigenous Australians and Invader Dreaming: A Critique*, John Bale and Mike Cronin (eds.), *Sport and Postcolonialism*, Berg, 2003.
- \* Gregory de Moore, Tom Willis, *Marngrook and the Evolution of Australian Football*, Rob Hess, Matthew Nicholson and Bob Stewart (eds.), *Football Fever: Crossing Boundaries*, Maribyrnong Press, 2005.
- \* 藤川隆男『オーストラリア 歴史の旅』朝日新聞社、1990。
- \* 藤川隆男編『オーストラリアの歴史』有斐閣、2004。
- \* 藤川隆男『猫に紅茶を - 生活に刻まれたオーストラリアの歴史』大阪大学出版会、2007。
- \* 小山修三、窪田幸子編『多文化国家の先住民 - オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社、2002。
- \* 松山利夫『ユーカリの森に生きる - アボリジニの生活と神話から』日本放送出版協会、1994。